明治紀念之標日本武尊像をめぐって

森　仁史

わが金沢の兼六園に今も聳立する《明治紀念之標》は明治十三年（一八八〇）という日本のモニュメントとしては最早期に属し、日本で最初の銅像として知られる。大熊氏廣の手になる靖国神社境内の《大村益次郎像》に先駆けること十三年余りである。西洋彫刻を学んだ後に建てられた大村像よりもこれだけ早かったということはその像容や建立技法、建設動機等などが前近代からの過渡期に成り立ったものであるほかはなかっただろう。これについてはすでに多くの言及があるのだが、改めて身近になったこの像について整理し、考えてみた。

幸い一九九〇年から一九九二年にかけて、この《明治紀念之標》は石川県によって全面的な修復工事が施され、一九九四年に大部の報告書、『兼六園「明治紀念之標」修理工事報告書』（（株）廣瀬与志雄建築設計事務所編、石川県兼六園管理事務所発行）が作成された。これによって、像のエックス線撮影・超音波探傷、像の測量、基壇の石積みの解体・再建などこの工事の経過、内容とそれによって得られた新たな知見を共有することができるようになった。とくに像の内側に鋳造着手と竣工の日付の線刻が発見されたことにより、従来石碑碑文によって知られていた「明治十三年第七月十九日着工、仝年第十月十九日竣工」が紛れもない事実であり、これに関わった鋳造世話人、鋳造監督、鋳造用係の氏名が明らかになった。建立時には石川県であった高岡金屋町で鋳造され、三ないし五つの部分に分けて荷車で運ばれ、現地で接合されたとのことである。この報告書の執筆意図は修復工事の記録にあるためか、記念碑の現状や記録の検討についてはきわめて断片的な記述に終始しており、これ以前に出版された『兼六園全史』（兼六園観光協会、昭和五十一年）の資料的価値は依然として減ぜられていない。

この記念碑の柵内にはじつに十五件もの碑文が認められるものの、右記二書にはその全容が記述されていない。像について何事かを語るうえで欠かせない資料であるはずなので、とりあえず総てを書き出しておく。番号は工事報告書図面に従った。

1　大谷正光（光勝）歌碑　年不詳
2　石川県戦死士尽忠碑　明治十一年九月　前田斎泰撰並書
3　明治紀念之標　陸軍大将　熾仁親王書
4　崇忠会碑　明治十九年九月　藤田維正撰
5　捐貨遂註本
6　（明治十年九月西南乱初平軍凱旋…）　明治十三年十月　負担者
7　（氏名）
8　負担者
9　水盤
10　紀念標日本武尊鋳造竣工年月人名碌　〔明治十三年十一月〕
11　明治記念標碑銘　明治十三年十月　石川県令千坂高雅
12　大谷光勝和歌・大谷光瑩漢詩碑
13　明治記念標記　明治十三年六月　陸軍歩兵中佐山口素臣
14　（明治十三年九月二十五日金沢兵営東隅轟声一発黒煙…）　明治十六年六月　陸軍歩兵中佐仲木之檀誌
15　（氏名）　8の続きか

これらのうち、記念碑と同時に作成されたのは5～8、15及び11のようである。前者はこの碑の建設費を寄付した軍人、市民の名を刻んだと思われる。11は県令の撰文による公的な趣旨説明である。一番大きな13はこの記念標の提唱者であった人物が撰文したもので、建設に先駆けて作成されている。1と12は建設後の法要の主体であった本願寺が建立したものと思われる。碑の完成後に14、4が追加されている。碑に加えてさらに追悼の意を表そうとしたのだろうか。いずれにしても記念碑そのものが総てを表

意すべきだとする近代的なモニュメントとはいささか異なる成り立ちがこの経過からも伺える。

しかし、この像がどのように決定されたか、作者は誰なのかについては、一九九〇年の調査によっても依然として明確にはできていない。像の原型を探るうえで、今日残されているのは台座裏に「明治十三年六月　御神像師松井乗雲斎　六十六翁」と墨書された松井乗雲による《日本武尊像》（石川県立美術館蔵）〔図1〕である。この日付が碑に先駆ける前記13と同じ日付であるのは単なる偶然なのだろうか。また、勧業博物館が作成したと思われる共箱には、明治十三年を十四年に訂正した日付も墨書されていて、制作年にいわくがありそうである。この作品は昨年高岡市美術館の「高岡美術百科」展において、久方ぶりに展示されたのを実見することができたのだが、きわめて完成度が高く、緊張感あふれる若い武人として日本武尊が表現できているように感じた。山森青硯によってこの松井による素描〔図2〕も紹介されている（『郷土工業物語』私家版、昭和六十三年）。

2　松井乗雲《日本武尊像》

1　松井乗雲《日本武尊像》
（石川県立美術館蔵）

松井家は金沢から京都に出て修業し寛永十七年最初に大仏師の称号を得てより、代々浄土信仰の厚い地で仏師を営んだ。幕末に当主であった乗運は十三代藩主前田斎泰から度々命を受けたこともあるので、作者としてありえる選択と思われるが、実現した日本武尊像は全く別な像である。これについて、『高岡銅器史』（高岡銅器協同組合、一九八八年）は原画は岸光景が描いたとし、木彫原型は田村与八郎の作だとしているが、水島莞爾はこれに対して原画は佐々木泉竜と断定している。しかし、いずれも決定打を欠いているように思われる。そもそも松井案にどのような決定的な反対理由が成り立つのかが不明である。

3　五雲亭貞秀《日本武尊》（『前賢画譜』）

日本武尊は近世に浮世絵でも描かれた画題であり、よく知られる菊池容斎『前賢故実』（文政八年―天保七年）以外にも典拠となりえるような出版があるので、紹介しておきたい。五運亭貞秀『前賢画譜』上下巻（嘉永三年）に所収されたもので、神代六歌仙の一人として日本武尊〔図3〕が描かれている。従って、この頃の仏師や鋳物師が制作に当って依拠しようとすれば、いくつもの選択肢や先例はあったのである。

西南戦争の戦没者慰霊を日本武尊像によって表象しようとした理由については、前記石碑6に日本武尊の東夷征伐に際して「挙国人加其軍以賀東征之偉　是所以国名之由而起也」と記されているように、加賀武人をシン

ボライズするために日本武尊を選んだのだとすべきようだ。また、この意図に基づいて短い準備期間の間に当初から日本武尊像が想定されていたことは前記の松井乗雲の木造が準備されたことやこの碑文の記述からも首肯できる。この理由以外に、西南戦争を熊襲征伐になぞらえることは当時の金沢人の意識からは少し無理があるようだ。加賀、特に金沢にはこの頃には征韓論、台湾出兵に共鳴し西郷に賛同する旧士族も多く、明治十一年紀尾井坂事件の実行犯となった六名のうち五名が石川県士族だったのだから。この翌年には暗殺の首謀者を主人公とした『島田一郎梅雨日記』全五巻が東京で出版されるほどであった。島田は戊辰戦争に参戦し、明治四年職業軍人を志して大阪兵学寮に学ぼうとしたが、年齢制限や学校移転のため果たせず、金沢に戻り八年不平士族を糾合して三光寺派を形成し、一時は四百人余りの成員を数えた。彼らは西南戦争に呼応して決起しようとして失敗、その後は有司暗殺を目指すことになった。

確かに一県出身として三百九十名もの戦死者（全体の二割）がでたことは異例であり、西南戦争終結一年後の明治十一年九月に尾山神社境内に前田斎泰撰文による「石川県戦死士尽忠碑」（前記2）が建立された。これはこの年、九月末から十月初旬にかけて長野から石川、福井県を明治天皇が巡行したことに合わせて企図されたと思われる。明治天皇は金沢では、撚糸会社、製糸会社、銅器会社など士族授産に邁進する人々を激励した。この尾山神社は明治六年藩祖前田利家を祀るために建設されたもので、士族出身の多かった戦死者の追悼にこの場所を選んだのは至極当然だったろう。この碑は明治十四年七月に《明治紀念碑》脇に移築され、現在に至っている。

同じ目的で違う碑が建てられたのは夫々の建設主体が異なっていたからであろうか。この時期の金沢士族の間には前記の三光寺派と対抗関係にあった多数派の忠告社が結成され、一時は県政を牛耳っていた。《明治紀念標》周囲には5、6、7、15と相当数の負担者（寄付者）の氏名を記した碑文が取り付けられており、この碑の建設がより一層大衆的な拠出によって果たされたことを伺わせる。

これらの死者に弔意を表すに際して、この地でもっとも多く信仰を集めていた本願寺派が関わることは自然だっただろう。大谷家の歌碑が献納されたし、像が完成して後、明治十三年十月二十六日から三十日にわたって東西本願寺門主も出席して大がかりな祭典が行われた〔図4〕。この後、毎年五月に祭祇が行われたとのことだが、現在は途絶えている。じっさい、土地の人々はこの像を「かなぶつさん」と呼んで親しんだとのことであり、建設動機もその受容も仏教法要に近いものであったのだ。そうであればこそ、近世社会においてそうであったように、仏像の原型製作よりも鋳造が高次な仕事なのであり、尊敬されてしかるべきであった。であれば、近代彫刻のように原型の作者に拘泥する必要がなかったのであり、その名が忘れ去られてもやむを得ないことなのだろう。同じ理由で、石積みが太田小兵衛であり、石橋が石野伊衛門によることは語り伝えられている。

あたかも供養塚の如く、像の周りに碑の林立する有様はこの紀念標の本質と性格を雄弁に語りかけているようだ。

4 《東西本願寺行列記》（部分）明治13年10月

一寸

第四十三号　二〇一〇年八月

第四十三号目次

新・旧刊案内43　青木　茂　1
土方定一と勝本清一郎、またはハリコフ会議と大逆事件
江戸の面影　岩切信一郎　7
―隅田川花火・逆井の渡し・堀の内妙法寺に『釈迦八相倭文庫』の絵額発見―
行方不明後の《藤牧版画》の足跡（13）終章　大谷　芳久　13
近代日本画の構図決定格子（九）　金子　一夫　22
―江戸期：琳派―
性学裁判摘記　丹尾　安典　27
小林清親の銅版画帖　銅・石版画遺聞38　森　登　33
明治紀念之標日本武尊像をめぐって　森　仁史　42
堺・博覧会の時代　山田　俊幸　45

新・旧刊案内43

土方定一と勝本清一郎、またはハリコフ会議と大逆事件

青木　茂

土方定一さんの太平洋戦争敗戦の日までの著訳書については本誌三十九、四十号、『近代画説』十八号に脈絡もなく列挙した。そこになお洩したのを挙げると、

- 屋井参市編訳『ハリコフ会議の報告其他』昭和六年十一月、木星社書院、四六判、一五四ページ
- 土方著『天心』昭和十六年一月、アトリエ社（東洋美術文庫）、B6判、四六ページ、図版
- 土方著『岸田劉生』昭和十六年十二月、アトリエ社、B5判、一〇五ページ、図版
- エルンスト・ディーツ著、土方訳『印度芸術』昭和十八年四月（二千部）、アトリエ社、B5判、三〇三ページ、図版
- 土方著『デューラー素描』昭和十八年七月（千部）、創芸社、B5判、一二六ページ、図版

となる。つまらぬことを初めに書いておくと、ハリコフ会議の編訳者屋井参市（訳書『マルクス主義美学』では尾井三市）は土方の偽名で、平野謙によれば「オイサンピンということらしい」。また『デューラー素描』の六月二十一日付のはしがきには「旬日のうちに北京に赴くことになり……」とあり、「いつか今度はゆっくり、そして猛烈な勢ひで私のデューラーを書くやうになる」のは、随分と後年のことである。

さて、今回は僕にとっては荷が重すぎるがハリコフ会議について書きた